



# 古代ガラスに魅せられて

羽原恵子さん ウルトラ ノイ代表

プロフィール：1961(昭和36)年、岡山県倉敷市生まれ。女子美術大学洋画科卒業。アパレルやキャラクターを中心に商品企画およびグラフィックデザインを手がける一方、古代ガラスの蒐集家としての顔をもつ。1992(平成4)年、美術品の蒐集家であった亡き父のコレクション集『羽原明徳コレクション』を出版、1998(平成10)年には、コレクションの中から古代ガラスにしぼった『古代ガラス-H氏の場合-』を京都書院より出版する。トンボ玉を素材にしたジュエリーの企画や、『KOBEとんぼ玉ミュージアム』での企画展をプロデュースするなど幅広く活躍している。  
KOBEとんぼ玉ミュージアムWebサイト：<http://www.lampwork-museum.com/>

## ■とんぼ玉ものがたりの始まりです

古代より、ガラスの製法を覚えた人類は、いろいろな美しいものを作り上げました。たとえばガラスの装飾品や器が作られ始めたのは、メソポタミア周辺では前16世紀後半、エジプトでは前15世紀前半といわれています。古代における装飾品や器は実用を目的にしたものではなく、神への“祈り”として珍重されておりました。また、日本では“トンボ玉”と呼ばれて親しまれているガラスビーズ(表面に装飾をあしらった穴開きの玉)も、江戸時代には根付やかんざしといったお洒落アイテムとして流行したようです。

手のひらに乗るほどに小さい玉であっても歴史は幾千年と古く、幾人の手から手へと何カ国も旅をして、現在に存在している…。そんなロマンに満ちた古代ガラスに魅せられ、コレクションを続けているのが羽原恵子さんです。

## ■父が夢中になった古代ガラスに、今度は私が夢中になった

羽原さんは岡山県倉敷市の出身。倉敷は古くから芸術への理解が高く、若いアーティストを積極的に支援する懐の大きい土地柄。そんな風土に生まれ、美術全般に造詣が深い両親の影響もあって、少女時代は大原美術館を遊び場にしていたそうです。高校生の頃には美術関係の仕事に就きたいと考えるようになり、女子美術大学洋画科に入学。大学近くの東高円寺で一人暮らしをスタートさせ、「それ以来27年間、引っ越し先はすべて高円寺」と笑います。

「女子美術大学への進学は父の勧めが大きかったですね。当時、父が大変尊敬していた柳悦孝氏が学長であったこともあり、女子美で学ばせたかったようです」



▲古代ガラスに関わるきっかけを語る羽原さん

彼女の父である羽原明徳氏は、実は国内有数の古代ガラスの蒐集家。高い審美眼とその人柄で、美術商やガラス作家など多くの美術関係者と交流があったそうです。ところが1991(平成3)年、彼女が27歳のときに脳梗塞で倒れ、急逝してしまいます。

「持ち主を失った美術品の数々を母と眺めているうち『何か形にしたい』という思いが募り、コレクション集として出版することにしました。父と交流の深かった皆さまの助言や協力が大きな励みとなり、そこから2年程かけて父のコレクションを整理していきました。絵画、書、民芸品、着物、古美術品について調べていくうちに、晩年の父が夢中になっていた古代ガラスの魅力に、いつしか私まで夢中になっていったんです。

当時、私はグラフィックデザイナーとして独立していて、キャラクター商品の開発などいけば現代美の世界で生きていましたし、それまで古代美にはあまり関心がなかったのに、不思議ですね」

## ■古代の世界に思いを馳せることは、本当にエキサイティング!

父亡き後、トンボ玉を中心として古代ガラスの蒐集を引き継ぐことを決めた羽原さん。デザイナーとしての仕事を精力的にこなす一方、メソポタミアやエジプトの歴史を一から学び、現地で遺跡を巡り、古代ガラスの世界を多方面から紐解く作業にも没頭していきました。それから15年。羽原さんの古代美への興味は、まったく色褪せていないようです。

「古代の世界に思いを馳せることは、本当にエキサイティング。先人は何を考え、何を願ってその作品を作り上げたのか・・・それを知りたくて勉強と蒐集を続けてきたのですが、気がつけば知識と経験、そしてたくさんのお会いを得ることができました。また、コレクションを通じて父の存在を感じられることも、娘として素直に嬉しいです。古代ガラスという“宿題”を遺してくれた父に、とても感謝しています」



▲彼女の父、羽原明徳氏は国内有数の古代ガラス蒐集家だった



↘

## ■古代の装飾は、 当時における最先端のデザイン



▲羽原コレクション

「生前の父がよく『新しいものは古代に戻る』と言っていました。古いデザインは最先端の美として私の目に映っているのかもしれない。自己に向かいながら外に表現していくデザイナーの仕事と、外に視野を向けながら自分の目で表現していく蒐集は、もしかしたら間逆の作業かもしれません。

ただ私の場合は、両方が影響しあって人生のバランスがとれているように思います」

2005(平成17)年にはデザイナーとしての感性を生かし、トンボ玉を素材としたジュエリーブランド『ヘタイラ』および、古代オリエントに造詣の深いジュエリー作家、内山貞和氏とのコラボレーションによる『ヘタイラ・ヴァンホー』を立ち上げた羽原さん。また同年、アートディーラーの岩瀬豊氏、紺田隆樹氏と共に『古代モダン』というテーマでジュエリーを発表するなど、古代ガラスへの情熱は蒐集の域に留まりません。

新しい感覚で古代美を表現する一方で、「たとえ小さなトンボ玉であっても“時代の一時預かり”という意識を忘れてはならない」と強く感じていた羽原さんのもとに嬉しい依頼が舞い込みます。『KOBEとんぼ玉ミュージアム』設立に際して『羽原明德コレクション』の常設展示をお願いされたのです。美術品を個人で管理する難しさを実感していた羽原さんでしたが、父子二代に渡って大切に保管してきた品々を預けることに少なからず抵抗があったといいます。しかし、館長の熱意とミュージアム設立趣旨に賛同し、トンボ玉の歴史を伝える品々として展示する運びとなりました。年に一度、新しい切り口での企画展もプロデュースしていくそうです。

「古代人の美意識の高さと手仕事の素晴らしさを、少しでも多くの人に伝えられたら嬉しいですね。

コレクション歴15年という道のりは私にとっては人生の三分之一を占めますが、相手は古代です。歴史はどんどん塗り替えられますので、私の好奇心はまだまだ満たされそうにありません。これからも父と私の心を動かした古代ガラスの魅力を、いろいろな角度から発信していきたいと考えています」

(文：古木悦子)